主体的・対話的で深い学びを推進する生活科指導のポイント ―「思考力・判断力・表現力等の基礎 」の育成―

令和６（2024）年　11 月 13 日
玉川小学校　校長　小瀬　和彦

Ⅰ　課題

1　「活動あって学びなし」ではなく、具体的な活動を通して、どのような思考力が発揮されるのか、十分に検討すること。

2　幼児期に育成された資質・能力を、低学年教育として、滑らかに連続、発展させること。

3　幼児期の教育との連携や接続を意識したスタートカリキュラムについて、生活科固有の課題としてではなく、教育課程全体を視野に入れた取組とすること。

4　社会科や理科、総合的な学習の時間をはじめとする中学年の各教科等への接続を明確にすること。単に中学年の学習内容の前倒しにならないようにすること。

Ⅱ　生活科目標と、その意味

具体的な活動や体験を通して＊1、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし＊2、自立＊3し生活を豊か＊4にしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1)　活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴のよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。

(2)　身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。

(3)　身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

＊１「具体的な活動や体験を通すこと」：①「見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊ぶなどして対象に直接働きかける学習活動」、②「活動や体験を通して感じた楽しさや気付いたことなどを言葉、絵、動作、劇化などの多様な方法によって表現する学習活動」。
具体的な活動や体験の充実 ⟺ 言葉などによる振り返りや伝え合いの場の設定の充実

＊２「身近な生活に関わる見方・考え方」：①「身近な生活に関わる見方は、身近な生活を捉える視点であり、身近な生活における人々、社会及び自然などの対象と自分がどう関わっているのかという視点である」、②「身近な生活に関わる考え方とは、自分の生活において思いや願いを実現していくという学習過程であり、自分自身や自分の生活について考えていくことである」。

＊２「生かし」：生活科の学習過程において、児童自身が既に有している見方・考え方を発揮することであり、またその学習過程において見方・考え方が確かになり、一層活用できるようにすることが求められている。

＊３「自立」：①「学習上の自立＝自分にとって興味・関心があり、価値があると感じられる学習活動を自ら進んで行うことできることであり、自分の思いや考えなどを適切な方法で表現できる」ということ、②「生活上の自立＝生活上必要な習慣や技能を身に付けて、身近な人々、社会及び自然と適切に関わることができるようになり、自らのよりよい生活を創り出していことができる」ということ。
③「精神的な自立＝自分の良さや可能性に気付き、意欲や自信をもつことによって、現在及び将来における自分自身の在り方を求めていくことができる」ということ。

＊「豊か」：「自分の成長とともに周囲との関わりやその多様性が増すことであり、一つ一つの関わりが深まっていくこと」。

Ⅲ　「思考力・判断力・表現力等」の基礎の育成

身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え＊１、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする＊2。

＊１　身近な人々、社会及び自然などの対象を、自分とどのような関係があるのかを意識しながら、対象のもつ特徴や価値を見出すことである。

＊2　身近な人々、社会及び自然などの対象を、自分との関わりで捉えることによって、自分自身や自分の生活について考え、それを何らかの方法で表現すること＊3 である。＊3「表現する」ためには、相手意識や目的意識に基づいて表現内容や表現方法を設定する。また、表現した結果から、考え直したり新たな思いや願いが生まれたりする。（思考や表現などが一体的に行われたり繰り返されたりすることが大切である。）

「考える」とは：見付ける、比べる、たとえる、試す、見通す、工夫するなどの活動によって引き起こされる。「表現する」とは：気付いたことや考えたこと、楽しかったことなどについて、言葉、絵、動作、劇化などの多様な方法によって、他者と伝え合ったり、振り返ったりすることである。▹一人一人の気付きの表現⇒確かに・共有⇒多様な気付きが関連付けられ⇒新たな気付き

Ⅳ　生活科における主体的・対話的で深い学びを成り立たせる要件

◇　児童の思いや願いからのスタート

活動や体験は、教師の指示からではなく、児童の思いや願いから始まる必要がある。

一方、活動や体験の中で児童は没頭したり夢中になったりするほど感情が高ぶっているときは、すぐに「書きたい」「発表したい」という思いになるわけではない。落ち着いてくると（クールダウン）、「前とは色がずいぶん変わった」と変化を感じたり、「どうすればもっと遠くに飛ぶのだろう」と考えたりしている。その間合いを適切に確保することで、「伝え合ったり振り返ったり」して、表現したいという状況が生まれる。

◇　学習過程

①から④が順序よく繰り返されるものではなく、入れ替わることもあるし、複数のプロセスが一体化して同時に行われることもある。

①　想いや願いをもつ
②　活動や体験をする
③　感じる・考える
④　表現する・行為する
（伝え合う・振り返る）

◇　主体的・対話的で深い学びを成り立たせる要件

1　試行錯誤や繰り返す活動を設定する！
①　気付きの質を高め⇒見通しがもてる　　②　事象を注意深く見つめたり予想を確かめたりするなど見方・考え方の基礎を養うこと⇒目的・手段の関係をつかむことができる。

2　伝え合い交流する場を工夫する！
①　自分が発見したことと友達が発見したことを比べ、共通点・相違点を発見する
②　次に調べたいこと、願い･想いが育つ

3　振り返り・表現する機会を設ける！
①　活動や体験を言葉で振り返る⇒無自覚から気付きが明確に⇒気付きの共有・関連化
②　気付きの質が高まる⇒「比べる」、「例える」、「試す」、「見通す」

4　児童の多様性を活かし、学びをより豊かにする！
○　学習活動が多様である⇒それぞれの違いや共通点を見出す⇒多様性の気付き⇒質的向上

※　教師が「いいね」「そうだね」「なるほどね」などと、気付きを認め、共通の視点に気付かせたり、ストーリーをつなげたりしていく！